ユニバーサル就労シンポ第 2 弾 「ユニバーサル就労の社会化を目指して」参加者 110 人を得て終了

本年 1 月 28 日に開催したユニバーサル就労シンポジウムに続いて、去る 6 月 28 日 14 時 30 分から田町交通ビル 5 階会議室で行われた第 2 弾シンポジウムは、パネラー・スタッフを含む 110 人の参加を得て、成功裡のうちに終了した。 第 1 弾が「ユニバーサル就労」の導入編とすれば、今回は、障害者対象だけではなく生活困窮者対策としての位置づけがより強い内容だったといえよう。詳細は、添付のレジメ資料等をご覧いただきたい。

また、シンポジウム終了後、港区勤労福祉会館1階「キムラヤ」で、加藤会長を交えた情報交換・交流会には28人が参加し、実りある一時となった。

<プログラム>

14 時 30 分~ 開会挨拶 古賀伸明

(ユニバーサル志縁社会創造センター代表理事・連合会長)

14時35分~15時 ガイダンス「ユニバーサル就労とは」

平田智子(ユニバーサル志縁社会創造センターユニバーサル就労担当)

15 時 10 分~17 時パネルディスカッション

パネラー 浦野正男さん(全国社会福祉施設経営者協議会常任協議員・措 置施設経営委員会委員長)

桑山和子さん (NPO法人ぬくもり福祉会たんぽぽ会長)

山際 淳さん (日本生活協同組合連合会組織推進本部福祉事業 推進部部長)

山崎史郎さん(厚生労働省社会・援護局局長)

山本 幸司さん (日本労働文化財団専務理事)

コーディネーター 池田 徹 (ユニバーサル志縁社会創造センター代表理事) 16 時 50 分~ 閉会挨拶 加藤登紀子(ユニバーサル志縁社会創造センター会長・歌手) 17 時 閉会

<概要>

古賀伸明代表理事(連合会長)開会挨拶

ユニバーサル志縁社会創造センターは昨年 7 月にふたつのNPOが発展的改組を視野にいれながら誕生した組織で、本格的な稼働はこれからだが、誰ひとり疎外されないユニバーサル社会の創造を目指している。いま、日本社会を取り巻く状況は、大変な格差社会であり、世代を問わず孤立化や貧困、地縁、血縁、社縁の希薄化等、問題は山積している。そんな中で、ユニバーサル社会の中の重要な位置づけのひとつが今回のテーマであるユニバーサル就労である。どんな状態の人であっても社会に迎え入れるためには、雇用と中間

就労の在り方、今後の日本社会全体の労働政策、福祉政策が重要となる。一人ひとりその 人らしい働く場を得るための就労の在り方を考える本日の議論に期待している。ご多忙の 中集まっていただいた皆様、パネラーの皆様に感謝申し上げたい。



<ガイダンス> 平田智子ユニバーサル就労担当ディレクター

ユニバーサル就労について、定義、コミューター(支援つき就労)、ユニバーサル就労システムの全体像、取り組みフロー図等について解説。また昨年度社会福祉推進事業で行った「ユニバーサル就労の普及促進と就労困難者の社会的役割の創出に関する調査・研究事業」のアンケート結果等を紹介した。最後のまとめとして、こうした中間的就労の成果として、①コミューター全員が1年後にステップアップしたこと、②生活困窮者は、職場の理解が得られれば、支援が短期間で一般就労につながるケースが多い、といった報告がなされた。



<シンポジウム> シンポジウムの趣旨 池田徹代表理事

「ユニバーサル就労」は、厚生労働省で議論されている「生活困窮者の生活支援戦略」の

中で、「中間的就労」と位置づけられ、法制化も検討されている方向性にあるテーマである。 本日は、このユニバーサル就労の社会化を目指して、実りある議論と在り方を検討する会 としていきたい。

山崎史郎厚生労働省社会・援護局長

経済的困窮者・社会的孤立者の増大は、経済社会のセイフティーネットに、雇用・教育・住宅・家族と地域のネットの穴があいていることに起因している。「生活支援戦略」の基本的な方針は、①生活困窮者が経済的困窮と社会的孤立から脱却し、親から子への貧困の連鎖防止、②国民一人ひとりが参加と自立を基本としつつ社会的包摂社会の実現を目指し活力ある社会経済を構築する、③国民の信頼に応えた生活保護制度を目指すことで、そのためにも、中間的就労を含めた多様な就労機会を確保する必要がある。また、高齢者介護・障害者福祉・保育子育て以外に社会福祉の 4 本目の柱として、生活支援戦略が示す支援システムが重要となる。



浦野正男全国社会福祉施設経営者協議会協議員

全国経営協のアクションプラン 2015 の重点的な取り組みは、①サービスの質の向上(外部評価の受審、苦情解決の充実)②公益的取り組みの推進(一法人一実践の促進、低所得者への積極的対応)、③人材マネジメント(職員処遇の充実、職員育成の充実)、④組織統治の確立(理事・監事等の機能強化、評議員会の設置・強化)の4点である。2004 年度から全国の社福の公益的取り組みの実践事例集を発行し、累計で2700 事例になった。この意図は、社福の公益的取り組みを社会に伝えていくことにある。ただし、一法人一実践活動の限界は、連携不足にある。その突破口が大阪モデルとも言われる取り組みで、構成する各施設が基金を拠出して大阪府社協が窓口になって、生活困窮者に貸付はじめ伴走型支援を行っており、この動きは、神奈川県はじめ他の社福にも広がりつつある。

山際 淳日本生活協同組合連合会福祉事業推進部長

日本の生協の 2020 年ビジョンは「人と人がつながり、笑顔があふれ、信頼が広がる新しい社会の実現」である。多様な人々が働きつづけられる組織風土を目指しているため、ここでは、生協の障害者雇用の現状を報告する。まず、大阪いずみ生協の「ハートコープいずみ」と「ハートランドいずみ」について。コンセプトは「障害者中心に健常者が横並びで働き、働く喜びを実感してもらえる職場環境づくり」で、前者は知的・精神・聴覚 29 人が資源ごみ加工・販売などを、後者は 15 人が農産加工・生産を行っている。また、生協ひろしまでは、「ハートコープひろしま」と「ハートランドひろしま」が、それぞれ農産品の検品・包装と段ボールリサイクル処理に 6 人、生協ひろしまに出荷する野菜の栽培・収穫・包装などに 10 人が従事。



桑山和子NPO法人ぬくもり福祉会たんぽぽ会長

「たんぽぽ」の設立は 1999 年 5 月。助け合い活動から始まって、昨年度の売り上げは 5 億弱。常勤・非常勤等雇用は 197 人で、助け合い事業、介護保険事業、飯能市からの受託、ソーシャル・ファームなど多角的に行っている。ソーシャル・ファームとは、障害者や労働市場で不利な立場にある人々に雇用の機会を提供することに焦点をおいたビジネスで、2010 年度からないないづくしでスタート。東京ドームグラウンドの約 2 倍、25000 ㎡の休耕田を耕し、現在では畑 23 カ所で 30 品目の露地栽培を、高齢者 3 人、障害者等 6 人が、またフラワーガーデンでは、高齢者・障害者 2 人とボランティア等が参加しているが、つくった野菜や花を販売するのには販路が必要で、うちの施設の厨房や職員への直販、朝市やイベントでの販売、旬菜カフェたんぽぽでの販売などと多彩。ただし、農園の売上 589万円・赤字 550 万円、カフェ売上 1600 万円・赤字 1030 万円で計 1500 万円強が主に人件費だが赤字。ただ、この取り組みは、商店街や農業を変え、障害者に希望を与え、地域再生を果たしていると言える。



山本幸司日本労働文化財団専務理事

連合が発行した『希望と安心の社会づくり "働くことを軸とする安心社会"に向けて ~わが国が目指すべき社会像の提言』(別添冊子)に基づいて報告。

"全ての働く者"とは、正規・非正規の現役の労働者だけでなく、退職者、子どもたち、労働者の家族を含むすべての人たちを指している。また、「働くことを軸とする安心社会」とは、年齢・性別・障害の有無などを問わず、誰もが排除されず、活き活きとみんなが働き、つながり、支え合う社会のことをいう。そのためには、困難を取り除き、働くことに結びつく参加を保障するために、教育・家族・雇用・失業・退職の面から「5つ安心の橋」を架ける必要があり、安心社会の基盤づくりも重要である。まさに、「ユニバーサル就労」と、連合の目指すべき社会像の提言とは、同じ趣旨・意味である。

<会場との質疑応答>

- **Q** 社会福祉法人は資金の使途や事業等について法的にも管理されるが、公益的取組みを推進する「一法人一実践」といっているが行政指導を受けることはないか。
- A 池田 「地域福祉積立金」として設置、地域福祉を推進するための事業に助成している。
- **A 浦野氏** 既存事業を活用した取組みが多く、相乗効果を期待しているところが多い。 第2種社会福祉事業として実施できることもある。
- **Q** 20代の生活保護受給者が増えているのは、どのような背景と考えているか。
- A 山崎氏 若者の雇用で非正規労働が増えている現状がある。なかでも高校中退者の貧困リスクが非常に高いことが課題となっている。「貧困の連鎖」を防止するための生活支援体制が重要であると考えている。
- **Q** 自閉症の子どもを育てているが、アスペルガー等障害者手帳を取得するまでもない 方々がいるのが現状で支援を受けられないことが多く課題である。
- A 山崎氏 支援が必要な人に対して、高齢者介護、障害者福祉、保育子育てなど現状の

制度も改革が進んできたが、万全な制度ができても必ず「制度の隙間」はでき、抜け落ちる人が出てきてしまう。制度の谷間を埋めるのは、人によってしかできない。人が人を支援する方向で施策を考えている。

- **Q** 桑山さんに質問です。障害者就労A型とかB型をとれば赤字にならないでやっていけるはずなのに、なぜ、1500万円も赤字を出してやるのか。
- A 桑山氏 農園・フラワーガーデン・カフェはいずれも、障害者であれ、高齢者であれ 一般雇用を旨として最低賃金を確保する方針でやっている。また、このことは、法人の 理念の上になりたっており、第3の企業としてのありようを問うものでもある。まだ2 年目で、みなが応援する姿勢もあるため、赤字も理事会等の承認を得てトライ中である。 だから、5年以上の赤字は無理としても割り切った上で、この取り組みが休耕田を生き返 らせ、まちを生き返らせることのほうが大切であると思っている。
- **Q** 教師をしていたが、平塚市で教師向けにセミナー開催の案内をしてほしいと依頼した が組織の壁があり断念した。自賠責保険の運用益を交通事故被害者の支援にあててほし いと意見を出したが「契約者全体のものである」と却下された。弱者への理解がないこ とが残念だ。
- **A 山本氏** 労働組合は、組合員のための活動という面が強くあるが、もうひとつは社会 全体に対して貢献することが求められている。自己点検して社会に対して打って出て連 帯を呼びかけている。

<加藤登紀子会長閉会挨拶>

いまの若者たちの暮らしは都市化されていて、コンビニでパンやカップ麺を食べてマンガ喫茶で暮らし、家族と連絡をとりたくない若者が多いと思う。貧困の裏側に、都市化された生活ビジョンが見えるが、これは、田舎も一緒で、地方の町でくすぶっているように思える。お米だと茶碗1杯20円が、パンだと100円、200円する。これは日本だけではなく、世界も一緒で、お金がないと生きていけない暮らしになっている。しかし、果たしてそうだろうか。東北大震災後の避難所生活の際には、大きな家族というか助け合いのコミュニティがあったが、仮設住宅に入った途端、人間関係がズタズタになってしまったところが多い。昔、貧しかった時代には、あそこに行けばご飯が食べられる、ほっこりした温かい場所やふかふかした匂いのご飯があって、家族でなくても大きな家族の世話をするお母さんがいたり…。そうしたコミュニティの在りようが問われていると思う。

今度は、ユニバーサル農業に関するシンポジウムを開催して欲しい。みんなで一緒に畑をやって、一品ずつ持ち寄ったら何品も食べられるといった関係づくりが必要だと思う。

極端にいったら、生活保護者には現金でなく地域通貨しか渡さないといったことはどうだろうか。地域通貨を使う人は、いい形で社会に還元して循環型にしていって、地域通貨で桑山さんのところの「たんぽぽカフェ」で、食事をするとか。そうすると、障害はあるけれども一生懸命農産品をつくっている人と、働かない若者が出会う。そこには温かいご

飯の匂いがある。制度には乗らなくても、小さな単位で工夫があり、地道な人と人とのリアリティの中で、隙間の中でやれる、そうした楽しい出会いをつくづく感じながらパネルディスカッションを聞いていた。

このユニバーサル志縁社会創造センターは、どんな方とも縁を志す社会をつくりたいという意味である。都市だけが生活する場ではなく、田舎にも、もっと自由に暮らせる場所や、人と人とのつながりが素敵で、生きていてよかったと言える、思える社会を私たちは創っていきたいと思う。本日はご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

